



「雪は宝物」

雪旅籠の取り組みから学んだもの

月山志津温泉雪旅籠の灯り実行委員会
実行委員長 志田昭宏 氏

【はじめに】

私たちの雪の取り組みについて講演の機会をいただけたことに深く感謝します。

そして、平成 25 年度「やまがたゆきみらい大賞」を受賞されました「長井雪灯り回廊まつり実行委員会」の皆様、「月の沢龍神街道スノーアートフェスティバル実行委員会」の皆様、大賞受賞おめでとうございます。いろいろな地域の雪まつりが評価されることはとても刺激に思えますし、これからもいろいろと勉強していきたくと、あらためて深く思います。

雪に関して、まだまだ勉強中ですが、私たちが取組んできたことや想いを伝えることができればよいと思います。

私たちは「日常生活に必ず雪がある生活」をしています。冬はもちろん、6月もスキーシーズンで目の前には真っ白な月山が見える。秋になっても残雪が残っていますので1年中雪がある生活をしています。

その中からいろいろな取り組み、考えや知恵が少しずつ生まれてきました。これを、少しですが、分かりやすくお伝えしたいと思います。

【月山と月山志津温泉】

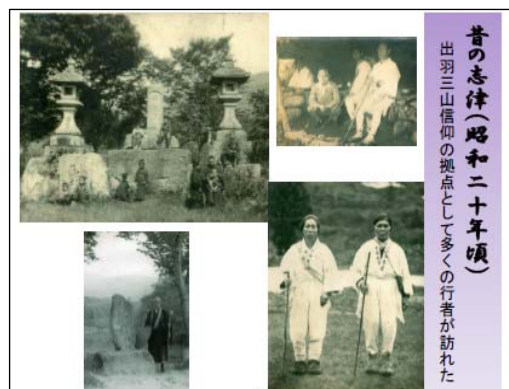
志津温泉は、今から千年以上前、出羽三山参りをする方々が訪れていましたが、山賊被害が多発したことで、1611年に江戸幕府の命により番所が設立され、後に宿場町が出来、現在は旅館街になりました。

昔は、白装束を着て月山や湯殿山参りをする方々が大勢いらっしゃった。現在でも白装束を着てお参りする方も、ここ数年多くなってきています。

月山と湯殿山、羽黒山の3つをあわせて「出羽三山」ですが、羽黒山が現在、月山が過去、湯殿山は未来の山と言われています。

今の時期に志津温泉に来るとこういった景色が見られます。ブナ林がきれいで、スキーをされるお客様も多い。今年の4月、5月は特に天候が良く、例年以上に多くのスキーヤーが月山にお越しになりました。

8月に入っても雪が残っていますし、雪の消え際から高山植物がたくさん生えてきます。それも登る楽しみのひとつです。



7月1日の開山祭は、毎年かなりのお客様が登られます。この写真は天気の良い年ですが、雲海が素晴らしく鳥海山も見えます。山頂に登った瞬間はすがすがしい気持ちになります。笹汁が写っていますが、開山祭限定の笹汁です。これを目当てに登る方もたくさんいます。

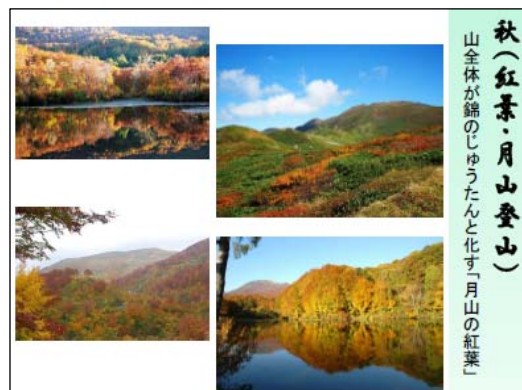
月山は過去の山、蘇る山と言われてますが、それにちなみ「かがり火祭り」を4年前の夏から行っています。地元の小学生が書いた灯籠を近くの沼に浮かべ、夜にはかがり火を焚き護摩祈禱をします。昔からの由来ですが、亡くなった方の魂が月山に迷わずに来れるように、この灯りを目印にしてほしいと、こういうイベントもしています。

秋の月山も、いろんな広葉樹がたくさんあり魅力的です。美味しいきのこもたくさんあります。芋煮会は、ぜひ志津温泉を利用してほしいと思います。

冬は豪雪地帯ですので、たくさん雪が降ります。ブナ林は多いですが、冬の間には届かない場所があるんです。今の時期では登れない、触れない枝に届くといった体験も出来ます。野生動物も多くいますので、朝起きて足跡を追っかけて行ったら、うさぎと遭遇したという体験もできます。

山形県全体でも山菜は豊富ですが、特に月山は種類が多く、いろんな調理法もあります。これから月山笹が本格的シーズンになりますので、ぜひ月山笹を食べていただいて、来るべき暑い夏に備えていただきたいと思います。

平成元年に温泉を掘ったら出てきました。源泉100%のお湯に入れば体が浮くほど塩分が濃いのが特徴です。これから通年観光をしなければならぬというところに温泉が加わり、4シーズンともお客様に楽しんでいただくためPRをしようという動きになりました。源泉を販売したり、多い雪を楽しんでもらうためのイベントもいくつか行いました。



秋(紅葉・月山登山)
山全体が錦のじゅうたんと化す「月山の紅葉」



冬(スノーシュートレッキング)
冬の厳しさが織り成す自然の芸術

【日本で一番の豪雪地帯】

志津地区は、人の住む地域では日本で一番の豪雪地帯です。

冬になると、いろんな天気予報に「酸ヶ湯温泉(青森市)」と、「肘折温泉(山形県)」の二つが出てきますが、一番は志津温泉です。

豪雪地帯への先入観というのがありまして、雪国山形は非常に雪が多く、毎日雪かきする日もある。そうすると「晴れた日が続くといいな」とか、「こんなに雪が降っているのに、もっと雪が多い地域に行きたくない」と思われてしまう。「冬になると志津温泉には入れない」といった情報が流れて、なかなか志津温泉に来ないという状況が長く

続いていました。

地元の人も、朝起きれば雪が積もって雪かきし、お昼ご飯を食べてゆっくりするかと思えばまた雪が降り夕方まで雪かきをし、晩酌をして、また明日に備えるといった日々が続くと、モチベーション的に暗くなる。

「早く大雪が止んでほしい」とか「早く春になってほしい」と思う方は多いと思います。私も小さい頃は「こんな雪の多い地域に将来住みたくない」と思っていた時代もありました。

これは春先の3月中旬か下旬くらいの写真です。昔は8m以上積もりました。春先にもかかわらず1階部分は全部埋まっています。5月を過ぎないと雪が融けない過酷な環境で先代の人たちは過ごしていました。



【志津温泉を知ってもらいたい！～雪旅籠の灯り～へ】

もっと志津温泉を知ってもらいたい、過酷な冬場ですが心から楽しみたいといった、いろんな思いがあり、それを何かの形にできないかなと考えていました。

雪旅籠をする前には、かまくらを作ったりスノーモービルの後ろに取り付けたタイヤチューブに人を乗せて走りまわるといったイベントも行いましたが、いろんな地域で同じことをしているので、なかなかピックアップされない。なかなか集客に結びつきませんでした。

では、何をしたらいいかと考えている時に、東北芸術工科大学（芸工大）の教授を紹介されました。その教授も雪に関心を持っていて我々も新しいイベントをしたい。「それではプロジェクトチームを組んで話し合ってみましょう」と、2006年に「雪と氷のプロジェクトチーム」を発足させました。

志津地区は、①三山行者の宿場町。②内陸と庄内を結ぶ六十里街道。③平均で6mの積雪。といった場所であること。そして、これが大事なのですが、④自分たちが楽しむ。⑤地球に優しいイベント。この5つを踏まえて何をしようかとなりました。「雪旅籠の灯り」という名前を付け、6mの雪を使い、宿場町を作ってみましょうと、志津温泉と芸工大の教授・学生とで、いろいろ試行錯誤して「雪旅籠の灯り」を開催する運びとなりました。

これは初年度の様子ですが、約二十数名の参加者で製作することになりました。製作する前に、志津温泉の歴史や背景を知ってもらい、現場に足を運んでもらうことで、どういうことができるかと進めていきました。初年度は手探り状態の中でやりました。

この年も雪が多い年で、天気が悪い時もあり、家の雪かきをしなければならぬのですが、雪旅籠を優先し、雪旅籠の作業が終わってから宿の仕事をする。雪旅籠を作りたい思いで作業をしていました。

- 1、三山行者の宿場町
- 2、六十里越え街道
- 3、平均6mの積雪
- 4、自分たちが楽しむ
- 5、地球に優しく



私たちにとって雪かきはいつものことですが、学生がスコップを使って本当に出来るのかとても心配しましたが、学生の方がアクティブで疲れを知らず、いろんな事をしてくれる。私たちが気付かない部分も、学生の視点で「なるほどな」と、嬉しい成果をいただきました。

初年度に出来たのがこの写真です。今の雪旅籠と違い、雪の壁をくり抜いて、ちょっと格子を付け、ちょっと人が入れるくらいのもので作りました。初めてですし、今まではかまくらくらいしか掘ったことがなかったので、出来た時にはとても嬉しかったです。

これに灯りを点けると、本当にこの中に人が住んでいるのでは、という雰囲気になりました。

このイベントは、長く続けて、変化を付ければものすごいイベントになると確信しました。

初年度は、志津温泉の青年部が中心でした。女将や親会は「本当に出来るのか」と一歩引いて見ていましたが、「これはいける。来年度は協力しよう」と、2年目からは志津全体で動けるようになりました。

2年目からは、いろんな重機を活用して、街並として作れるのではないかと作業しました。

空が明るい時の雪旅籠の様子と、真っ暗になってからの灯りの状況と、まったく違います。日が落ちるにつれ全然違う情景が見れるのも魅力的だと思います。

それから、来場のお客様が雪旅籠にゆきだるまを作ってくれたり、アレンジをしてくれたりします。来場者全員が実行委員会のメンバーになっていただける。

「アイスバー」というのをやっています。ろうそくの灯りとは対象的にLEDライトを使います。雪と氷を使いバーカウンターを付けて、お酒を楽しんでもらおうと、初年度から始めました。ここでは「ホットワイン」を売っています。ホットワイン目当てのお客さまも最近は増えてきて、日帰りでは誰か一人は飲めませんので、ぜひ宿泊をお勧めします。

雪旅籠の中は、いろんなところを掘りこみ、ろうそくを灯して飾り物をし、中に入ってもお客様に楽しんでほしい。いろんなものを置くだけではなく、いろんな写真を立てて「志津はこういうところなんだよ」「志津にはこういった特産物があって、春・夏・秋になっても、美味しいものがたくさんあるので来てください」とPRに繋がっています。



【クオリティーの追及】

2年目には新聞に掲載していただきました。

その翌年に「全国ふるさとイベント大賞」に応募しましたら、見事、大賞をいただきました。雪旅籠が評価されるのは初めてでしたから、大変盛り上がりました。

そういうのがきっかけとなり「雪旅籠とはなんだろう」と、少しずつですが世間に広がっていき、「ちょっと見に行きたいな」とか「作りにいきたいな」といった方からの問い合わせが多くなりました。

すると、これは大事なことですけども、私たちのほうが「取り上げてもらったんだから変なもの見せられない」、「少しずつ質を高めていきながら、お客様を出迎えましょう」という気持ちになりました。

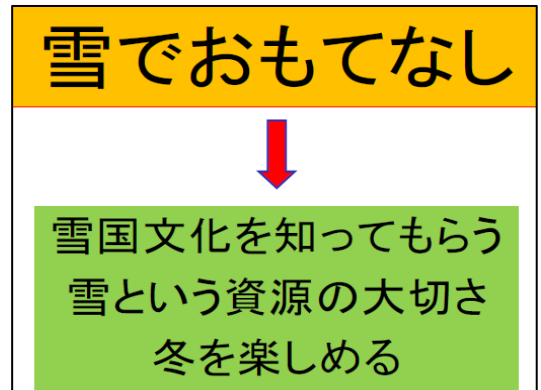


【雪でおもてなし】

今までは、それぞれ宿で人と人のおもてなしをしていましたが、雪でもおもてなしができるのではないかと。「豪雪地帯の雪国文化を知ってもらう」「雪という資源の大切さ」「冬を楽しめる」と、3つのおもてなしを通して、いろんな方に伝えていくことができるのではないかと思います。

雪国文化というのは、ただ雪が多いという訳ではなく、食に関しても真冬は生鮮食料品はなかなか食べれなくなりますから、昔から伝わる保存食もたくさんあります。

また「雪下ろし」も、雪国文化の大切なもののひとつだと思っています。雪下ろしをしていると、お客様がカメラを持って写真を撮りに来ます。雪を下ろすこと自体初めて見る光景で、雪の塊が屋根の上からどんどん落ちてくるのはなかなか見れない光景だとめずらしがる方も多い。こうした部分も残していかなければならない文化だと思っています。



【雪旅籠で婚活】

雪旅籠を使って婚活をしました。

男性 20 名、女性 20 名で応募したところ、女性 20 名は県外から、男性 16 名は山形市などから集まりました。終わってからアンケート見ましたが、「雪旅籠がきれいだった」という感想が一番多く、我々としては嬉しいですけども、婚活としては、あまり成立しなかったかなという反省があります。

雪旅籠の灯りの点灯に併せて午後 6 時から 8 時まで行いましたが、暗くてお目当ての女性が見つからない。あまり暗いと顔が見えないという課題もあり、2回目はまだですが、また婚活を行うときは、そういった課題をクリアして、雪旅籠の中で楽しんでほしいと考えてます。



【雪旅籠で結婚式】

一昨年、山形市のカップルの方から、「雪旅籠を見てすごく感動したので、ここで披露宴をしたい」と希望があり実現することになりました。

ちらちらと雪が降り良い演出となりました。

新郎には企画段階から話に入ってもらいましたが、「新婦にサプライズで」ということでしたので、雪旅籠の中で写真撮影をしようとして誘ってもらいました。親戚一同には事前にお話してましたので、新婦だけが当日まで知らない。白無垢姿で写真を撮りましょうと着替えてもらい、旅館から新婦が出た瞬間に、新郎と親戚一同で「おめでとうございます」というサプライズをうまく行うことが出来ました。地元住民もとても感動しまして、結婚式とは関係の無い一般の来場者の方々も、全員の拍手をもって祝っていただきました。

世界で初めて雪旅籠で結婚式を行ったカップルであり、私たちにとって世界で一番幸せになってほしいカップルの誕生でした。

雪旅籠で結婚式を挙げたいという方がいましたらぜひ連絡ください。全面的にバックアップします。



雪旅籠で結婚式

【灯りと音のコラボレーション】

雪旅籠の中で踊ったり、オカリナを演奏していただくイベントも行いました。

雪旅籠は、視覚的に楽しめるイベントですが、視覚だけではなく音も必要ではないかと。どんな音が合うか4～5年ずっと悩んでいましたが、吉村知事からオカリナ奏者を紹介され、昨年度雪旅籠にお招きし「灯りと音のコラボレーション」として、いろいろな曲を演奏していただきました。

昨年オープニングでは花火を上げました。

冬の花火は夏の花火以上に美しく、9年目にしてやっと打ち上げることができました。「旅籠の灯り」と「花火の明かり」がマッチしてとても美しい。来年も花火を上げたいと考えています。



【山形の冬のイベント】

一昨年、吉村知事から雪旅籠にお越しいただきました。

雪旅籠の灯りが、やっと山形県の冬のイベントとして認めてもらえたと思った瞬間です。

30分ぐらいの滞在だとお聞きしていましたが、少し案内するぐらいしか出来ないと思っていましたら3時間ぐらい滞在していただきました。寒い中でしたが時間を押してまで居てくれたことは、大変嬉しかったです。



吉村知事御来場

【笑顔と元気が益々増えてくる】

宿泊・来場者数ですが、初年度は3日間の開催で150人ほどお越しいただきました。うち50人くらいは関係者の方々だったと思います。回を重ねるごとに少しずつ増えて昨年度は6000人以上のお客様にお越しいただけるようになりました。

いろんな関係機関の方々の協力があってPRすることも出来ましたし、口コミもありましたが、いろんな協力があってこの数字までお客様が来ていただけるようになったと実感しています。

雪旅籠を行っている場所はとても狭く1万人とか2万人が来るようになると、お客様にご迷惑をおかけしてしまう心配がありますので、出来る範囲の中でやっていこうというのを目標にしています。

今まで暗かった冬でしたが、雪旅籠を始めてからは雪の状況が心配になたり、「そろそろ雪旅籠だから頑張るべ」とテンションが上がったりします。子どもたちは「雪旅籠は必ず冬にあるのが当然」と思っています。子どもたちにとって幸せなことと思います。いずれ、子どもたちが雪旅籠を受け継いでくれるかもしれないし、雪旅籠以上のイベントをやってくれるかもしれないと期待しています。

【人の未来を照らす希望の灯り】

初年度から掲げていますが、雪旅籠の灯りは「人々の未来を照らす希望の灯りであってほしい」という思いで9年間やってきました。

東日本大震災の翌年には被災された方々を志津のほうに迎えて、復興の灯りとして、ろうそくを1本1本に火を点けていただきました。

【重要なこと：自分たちが一番楽しむ事】

「自分たちが楽しむこと」が一番大事だと思っています。

自分たちが本当に楽しんでやらないと、このイベントは続かないと思っています。私たちが楽しくなく行っていると、お客様にはすぐ分かってしまう。「やらされているんだな」とか「楽しくないのにやっているんだな」というのは、お客様はすぐに察知します。楽しむことがなくなったら、雪旅籠は止めてもいいと思っています。

重要

- 自分たちが一番楽しむ事
- 協力者を増やしていく事
- 少しずつでも変化をつけていく事
- 行動力こそ問題を解決する糸口
- 楽しいものにメディアは注目する
- 継続こそ歴史なり！

【重要なこと：協力者を増やしていく事】

初年度からいろんなバックアップがありましたけれども、回を重ねるうちに雪のない地域の方々がツアーを組んでいただいているとか、関心を持ってもらうといった方が増えていくことによって、いろんな新しいことが出来るようになります。

私たちの固定された考えを良い意味で打ち砕いてくれるのは第三者のいろんな意見です。雪に対して「こんな視点もあるんだな」というのは、他の方々でないと気付かない部分もあると思います。

【重要なこと：少しずつでも変化をつけていく事】

毎年同じ雪旅籠を作っても、お客様は「去年も見たからいいや」となってしまいますので、いろんなところに変化を付けて「去年と違うからもう一回行ってみよう」とリピーターを増やしたいと思っています。

【重要なこと：行動力こそ問題を解決する糸口】

いろいろ考えても行動に移さないと、イエスカノーかわからない。

特に冬場はあちこち動いたりも出来ませんので、行動するしかないと決めた時に行動しないと結果が付いてこない、というのも学んだ一つです。

【重要なこと：楽しいものにメディアは注目する】

雪旅籠をやり始めた時に、日本全国でこういうイベントをやっているのかどうか調べましたが全然ありませんでした。

雪旅籠をやれば、オンリーワンになる。オンリーワンということはメディアでも取材に来てくれる。そういったところで志津温泉という名前も、少しずつ、いろんなところに知れ渡ったと実感しています。

【重要なこと：継続こそ歴史なり！】

今年の冬に10回目になります、まだまだ10回目です。けれども、雪の降り続く限りやっていけば何十年にもなる訳ですし、山形の歴史、雪国の歴史として確立していきたいと考えています。次の世代、また次の世代で、そういった歴史を受け継いでいってほしいと願っています。

【課題は山積み】

雪旅籠をやっていいところだけではありません。いろいろ問題になっていることもあります。

〔開催期間中のスタッフの確保〕

雪旅籠は志津温泉の人間が中心になってますが、志津には旅館が10軒、人口は50～60人くらい、うち動ける人間は30人くらい。30人だけではどうしても出来ません。大学生の協力も必要ですが、それだけでは出来ない。

だとすれば第三者です。

関係各所の方々にもご協力いただいたり興味を持っている人をいかに志津温泉に呼び込み関心を持ってもらい、様々な意見を聞いて、雪旅籠の実行委員会に入ってもらえるか。そういった努力をしています。

私は、雪旅籠の期間は宿屋としては戦力外通告を受けてます。この10日間は宿にいない外にずっといる。実行委員長であればだまって座っていればいいじゃないか、ということもありますが、どうしても人出が足りない部分が出てくる。そういったところをサポートしながらやっていると、いつの間にか10日間のお客さんの顔を見ていない。今年は何人入ったか後から聞かないと分からない。

そういった部分を無くすために、いろんなスタッフを増やすといったことも重点的にやりたいと考えています。

〔財源の確保〕

今までは、いろんな企業から協賛金をいただいて運営していました。

年々いろんなところで規模が大きくなり間に合わなくなってきたこと、これからは見るだけではなく1年間通して雪旅籠を思い出してもらえようがないか、ということから「通行手形」を発行しました。志津は歴史的に番所になったと

通行手形の発行



いう関係もあり、通行手形にしましょうということになりました。一昨年から皆様に買っていて、なんとかそれを運営費のほうに回らせていただいています。

【効率的な情報発信】

雪旅籠を、どう売り込むか。

どうターゲットを絞るのか。PRするのは県内か県外か。雪のある地域か無い地域か。そういったことをはっきりさせて情報発信しなければいけません。

イベント大賞をいただいた頃は県外のほうに発信していた頃でした。県外に発信したほうがお客様が来るのではないかと考えていましたが、それは違うんですね。

一番大事なのは、「山形県内の人にまず知ってもらわなければダメだ」ということです。山形県の人山形県のイベントだと認めてくれないと、山形のイベントとしては確立しないということに4～5年やって気付かされました。

【第三者からの視点、知恵、工夫】

第三者からの意見はとても重要です。

私たちは冬になれば毎日雪を触りますが、雪旅籠をやってから「これをこうしたらいいんじゃないか」と、いろいろ気付かされる所が多くなりました。

そこに今度は、「ここはこうやるべきだ」とか「昔はこうやっていたんだよ」と、地元の人たちでもあまり話さない人たち、私たちの大先輩の方からいろんなアドバイスを聞ける、雪に対していろいろ勉強できる機会も多くなりました。

いろんな方から、「雪旅籠きれいだ、美しい」という意見もそうですが、「ここは違うんじゃないか」、「こうしたほうがいい」といった意見をいただけるのを私たちは待っています。

【単発的ではなく地域の未来像を】

長く続けていくことで、ひとつのものとして確立できるということです。

「雪旅籠は大変なので止める」と言うのは簡単ですが、続けていく。なぜ続けていくか、その理由がはっきりしているかどうか、今後何十年と続けていけるか決まってくるのかなと思います。

【伝えたいこと】

昨年度は、雪の降らない地域で雪が降りました。道路が埋まったり車が埋まったり大変な思いをした人も多く、私たちもニュースで見て「雪って恐ろしいな」とあらためて痛感しました。

私たちの雪旅籠は雪の美しいところや優しいところですが、反対側の厳しさ、自然のものは裏を返せば恐ろしいものになるということを思い知った冬になりました。

それが雪旅籠の前でしたので「雪はイヤだな」とか「雪はやっかいものだ」「早く春になってほしい」という空気が流れていたと実感しましたし、「雪旅籠に来る人はいるのかな」、「あれだけいろんな被害があって、さらに多い雪が降る志津地区に足を運んでくれる人はいるのかな」と大変心配しましたが、それでも、いろんな方々からお越しいただきました。

楽しいところだけではなく厳しいところも、今後、雪旅籠を通じていろんな人に伝えていかなければならないと、志津温泉のみんなと話し合いました。

・雪という資源への理解

・雪の恩恵⇒感謝

・雪と共に生きる

・雪国文化の伝承

【雪と共に生きる】

雪っていったいどんなものでしょうか。

雪まつりに行けばいろんな楽しみがありますがけれども、毎日生活していて、たとえば冬に出勤するとき雪があれば雪かきをしなければならない、冬になればいろんなところで、ひと手間、ふた手間かかる。雪が降れば渋滞にもなります。道路が狭くなったり、排雪に時間がかかったり、不便な部分があります。

私たちにとっても、雪は100%楽しいものではないと思っています。ですが、雪があつてこそ、いろんな恩恵が受けられると感じています。

雪があつてこそ、豊富な山菜が出る。水に関しても恵まれている。月山はとても美しく、今、雪が見えれば涼しい気持ちになる。雪というのは、感謝する部分も多いとイベントやりながら気付いたところです。

私たちにとって雪は「常に共に生きる」ということであり、「共存する」というのはキーワードとっております。

【雪国文化の伝承】

各地域でいろんな冬の文化があります。

それをもっともっと発信して、山形の冬の文化はこういうものだ伝えていければいいなと思っています。

雪国山形は、東北の中でも雪が大変多いところです。多いからこそ、いろんな食べ物があつたり、四季の変化が美しい。志津温泉では5月下旬でも桜が咲いていますので、桜が散る時期になっても雪が残っていたり、いろんな季節があるんです。春・夏・秋・冬と四季がありますが、春と夏の間にももう一つ季節があるんです。そう考えると、山形県の季節は、四つではなく七つなんですね。七つの季節の楽しみ方がある。ぜひ皆さんも、春から夏になる間、夏から秋になる間の季節に、どんなものがあるか探してほしいと思います。

【人々の心が熱く強い】

冬は厳しいですよ。厳しい環境の中でも「雪かき」は、皆さんが必ずされていると思います。雪かきをするというのは、精神的に鍛えられる。イヤですけど、やらなければ車も動かせないし次の仕事も進まない。山形県人は、もくもく雪を掻き出しながら、強い心を鍛えているのではないかと思います。もし生存競争があつたら、山形県の人が一番強いなと思っています。

同じ大変さを知っている人と話をすると共感を持てる。昨日の雪はどうとか、来年の冬はこうなるとかの話で盛り上がる。そういうところでも、人と人との繋がりが出来てくる。その一番の元は雪だというのは、山形だからこそ味わえると思っています。

【山形県人としての誇りと幸せ】

山形県は、雪があつて注目されるのではないかなと思っています。

各市町村には、「温泉」がある。いろんな「伝統文化」や受け継いでいる「食べ物」もある。それにもうひとつ、各市町村にあるものが「雪」なんです。

雪は冬になれば必ず降りますから、今後は、イヤなものではなく楽しいものとして、ちょっと見方を変えてほしい。そうすれば、今までイヤだった冬も、ちょっと楽しくなるのではないかなと思います。今までは冬はイヤだと思っている人も、「来年の冬に何をしようか考えてみようかな」となっていたら大変嬉しく思います。

【子どもたちへ】

子どもたちは、まだ雪に対して「楽しい」というイメージの方が強いと思いますが、大人になり、「やっぱり雪は大変なものだ」と気付いていくと思います。

ですが、子どもたちが将来的に「雪は山形の宝物だ」と思ってくれて、なおかつ、山形を盛り上げるためにいろんなことをやってみよう、という動きになってくれたら、大変嬉しいなと思いますし、そうなるまでに、私たちが子どもたちに伝えていかなければならないものは多いと思います。

冬になったら、冬に限りませんが、小さい頃から「雪というのはこうなんだ」ということを説明しながら、雪を理解してほしいなと思っていますし、いろんな機会があれば、「雪をもっと好きになってほしい」と伝えていければいいなと思っています。



編集 やまがたゆきみらい推進機構

平成26年6月4日(水)に行われた「やまがたゆきみらい推進機構記念講演」の一部を抜粋したものです。